

日本語の右方転移：移動分析と削除分析*

木 村 宣 美

0. はじめに

日本語は主要部後置型 (head-final) 言語であり、述語 (predicate) が通常文末に生じる。しかしながら、次の (1b) に見るように、述語の左側に本来位置する要素が述語に後続する位置に配置される右方転移 (right dislocation) 文が日本語にもある。¹

- (1) a. 君は、本当にダメだね。
b. 本当にダメだね、君は。² (久野 1978:67-68)

(1b) のような右方転移文の派生に対して、概略、3種類の分析が提案されている。右方転移文の派生方法の一番目は、述語に後続する位置に置かれる要素、すなわち、転移されている要素が、本来の位置から文末に右方移動 (rightward movement) しているとする分析である。例えば、(1) を例に取れば、(1a) の「君は」が文末に移動されて、(1b) が導かれることになる。右方移動に基づく右

* 本研究は、平成22年度－平成24年度日本学術振興会科学研究費助成事業 (科学研究費補助金) ((基盤研究(C) 研究課題『句構造の非対称性・線形化と構造的依存関係に関する理論的・実証的研究』) [JSPS 科研費 22520487] の助成を受けたものである。

¹ Ross (1986/1967) によれば、右方転移は転写変形 (copying transformations) の一つであり、(ia) から (ib) を導く規則である。

(i) a. The cops spoke to the janitor about that robbery yesterday.

b. They spoke to the janitor about that robbery yesterday, the cops. (Ross 1986/1967:257-258)

(ib) では主語位置に名詞句 the cops に対応する代名詞が置かれ、文末に同一指示の (co-referential) 名詞句が生じている。Ross (1986/1967:257) によれば、英語の右方転移では、代名詞ではない名詞句が右方にチョムスキー付加され、もとの位置に同一指示の代名詞が置かれる。Rodman (1997/1974:48) は、左方転移 (left dislocation) と異なり、右方転移では代名詞 (an anaphor in the main clause) が、常に生じなければならないことを指摘している。

(1b) に対して、右方転移文、後置文、右方転位文等の用語が用いられているが、本稿では、右方転移文という用語を用いる。なお、右方転移との用語を用いるが、これは、移動 (movement) が関与することを主張するものではない。右方転移文の研究において、一般に用いられている用語を便宜上借用しているにすぎないことに注意されたい。

² 本稿では、右方転移された要素に、波線を引くことにする。

方転移文分析は Haraguchi (1973) で提案されている。二番目の派生方法は、従来右方移動が関与すると分析された右方転移文は、動詞句前置 / 残余句移動等の左方移動 (leftward movement) によって生成されたとする、黒木 (2006) や Fukutomi (2006) 等で提案されている分析である。この分析に従えば、(1b) は、「本当にダメだね」の左方移動により、導かれることになる。三番目の派生方法は、右方転移文は、移動規則によって導かれるのではなく、文の部分的繰り返しによって導かれるとする分析である。この分析では、(1b) の前半「本当にダメだね」は省略文として生成され、この省略文の主語が「君は」であることをはっきりさせるため、文末で繰り返すことによって、(1b) が導かれるとする、久野 (1978)、Abe (2004)、綿貫 (2006) 等が提案している分析である。³

本稿の目的は、日本語の右方転移の諸特性に基づき、日本語の右方転移文に対する移動分析 (Haraguchi (1973) の右方移動分析、黒木 (2006) や Fukutomi (2006) の左方移動分析) と久野 (1978) や Abe (2004) が提案する「省略文 + 繰り返し文」に基づく削除分析を批判的に検討し、分析の可能性を探ることにある。

1. 右方転移文の派生：移動分析と削除分析

日本語の右方転移文の派生に関しては、述語に後続する位置に要素への右方・左方移動規則の適用により生成されたとする移動分析と移動規則ではなく削除 (deletion) に基づき導かれるとする「省略文」+「繰り返し文」に基づく分析、すなわち、削除分析が提案されている。この節では、これら 2 種類の分析を概観する。

³ 久野 (1978:68) では、日本語の右方転移文 (久野 (1978) では、後置文) に関して、次の (i) のような伝達機能があることが指摘されている。

(i) 後置文の伝達機能

後置文において主動詞の後に現われる要素は、

- (a) 話し手が最初、聞き手にとって、先行する文脈、或いは非言語的文脈から、復元可能であると判断して省略したものを、確認のため、文末で繰り返したものか、
- (b) 補足的インフォメーションを表わすものに限られる。

綿貫 (2012) は、後置される情報は省略可能な情報であると分析する久野 (1978) 等の分析とは異なり、話し手の頭に最初に浮かぶ重要・緊急の情報が先に発話された結果、副次的な情報が後に発話されるという原理を提案する Simon (1989) の分析を支持し、「後置される要素が文脈上解釈可能である場合と解釈不可能な場合があるとする分析を提案している。解釈不可能な情報が後置される場合、最も話したい・聞きたい情報を発話した結果として省略された (一旦焦点から外れてしまった) 情報を後置することで、その情報を再焦点化し、話し手が自己の発話意図を充足する機能を有する」との分析が提案されている。Gundel (1977/1974)、久野 (1978)、高見 (1995)、Rodman (1997/1974)、Huddleston and Pullum (2002) 等では、i) 疑問詞 (不定名詞句)、ii) 疑問文の焦点を担う要素、iii) 新情報を担う属格名詞句等が右方転移されることがないということに基づき、右方転移される要素は、談話機能上の旧情報でなければならないとの分析がなされている。今後、綿貫 (2012) の主張する「文脈上解釈不可能な場合」を詳細に検討する必要がある。

1.1. 移動分析

黒木 (2006) は、右方移動 (Haraguchi 1973) が適用されて導かれると分析されていた構文には、動詞句前置 / 残余句移動等の左方移動が関与していると分析されるべきであると主張している。この分析は、左方移動のみを可能な移動操作 (右方移動は原理的に禁じられる) と位置づける反対称性統語論 (antisymmetry of syntax; cf. Kayne 1994) に合致する分析であると主張されている。

黒木 (2006) は、i) かき混ぜ (scrambling) と右方転移文が異なる統語特性を示す (cf. Saito 1985), ii) 作用域 (scope) 解釈や上方制限 (upward-boundedness) から右方移動が関与していない, iii) 概念的 (conceptual) 観点から、単節構造を仮定すべきであると主張し、単節構造に基づく左方移動分析を提案している。また、様態標識である「よ」が、様態句 (ModalP: MdP) の主要部として現われ (cf. Endo 1996), この指定部に任意の TP/VP が左方移動するとの分析が提案されている。左方移動に基づく具体的な派生を、次の (2) を例にとり、考えてみることにする。

(2) 主語「右方」転移文

- a. [_{TP} 太郎が [_{VP} 花子を_i [愛している e_i]]]
- b. [_{MdP} [_{VP} 花子を_i [愛している e_i]]]_j [_{MdP} よ [_{TP} 太郎が e_j]]] (黒木 2006:219)

人間言語の基本語順は SVO であると仮定し、(2) では、基底構造において目的語「花子を」が動詞句指定部へ顕在的に (overtly) 移動している。(cf. Kayne 1994) その後、動詞句 [_{VP} 花子を_i [愛している e_i]] が様態句指定部に移動され、右方転移文が導かれることになると黒木 (2006) では提案されている。

1.2. 削除分析

久野 (1978) では、日本語の右方転移文は、移動規則の適用によるのではなく、文の部分的繰り返しによって生じると主張されている。すなわち、(1b) の前半「本当にダメだね」は省略文として作り出される。そして、この省略文の主語が「君は」であることをはっきりさせるため、それを文末で繰り返すことによって、(1b) が導かれるとする分析である。日本語の右方転移文は、前半が省略文で、後置要素も省略文で、確認あるいは補足のために付加された要素であると分析されている。本稿では、このような「文の部分的繰り返し」に基づく分析を、削除分析と呼ぶことにする。

Abe (2004) は、久野 (1978) に従い、日本語の右方転移文は複合節構造 (complex clause structure) を持ち、削除規則の適用と述語の後にある句 (postverbal phrase) の左方移動に基づく分析を提案している。⁴ この分析を、次の (3) の派生 (4) を例にとり、考えてみることにする。

⁴ 後置要素である省略文において左方移動が適用されるとする分析には、右方転移文に対する移動分析と同様の問題が生じることになる。

(3) ジョンは批判した、メアリーを。

(4) a. ジョンは e_i 批判した、メアリーを_i [ジョンは e_i 批判した]

(leftward movement of object)

b. ジョンは e_i 批判した、メアリーを_i [e]

(deletion under identity) (Abe 2004:56)

右方転移文の派生 (4a, 4b) において、「メアリーを」が2番目の節頭 (the top of the second clause) にあり、この節の他の要素が1番目の節との同一性のもとで削除される。この分析は、久野 (1978) の分析を具体化したものであると言うことができる。これら2つの節の関係は、節の繰り返し (clause-repetition) で、2番目の節においては、操作語移動 (operator movement) が適用されるとの分析が提案されている。

2. 右方転移文の特性：移動分析と削除分析

2.1. 島の条件 (island conditions; cf. Ross 1986/1967, Rodman 1997/1974)

久野 (1978:74-75) では、日本語の右方転移において、従属節中の要素が自由に主節の動詞の後に現われるわけではないこと、すなわち、複合名詞句制約 (complex noun phrase constraint: CNPC) に従うことが指摘されている。

(5) a. [この間、あのレストランで食べた] 海老は、おいしかったね。

b. * [この間食べた] 海老は、おいしかったね、あのレストランで。

(6) a. 花子に [太郎から貰った] 柿をやりました。

b. * 花子に [貰った] 柿をやりました、太郎から。

(7) * 昨日 e_i 買ったワインを飲むよ、ジョンが_i。(Endo 1996:3)

(5-7) では、複合名詞句「この間、あのレストランで食べた海老」、「太郎から貰った柿」、「昨日ジョンが買ったワイン」の中にあると考えられる「あのレストランで」、「太郎から」、「ジョンが」がそれぞれ右方転移されている。(5-7) が非文法的であることから、日本語の右方転移は CNPC に従うことがわかる。

CNPC と同様に、右方転移が付加詞条件 (adjunct island) に従うことが、Abe (2004) や Fukutomi (2006) で指摘されている。

(8) a. ?* 私は [ジョンが e_i 食べた] ので彼の母親を叱りつけた、ケーキを_i。(Abe 2004:55)

b. ?* ジョンは [ビルが e_i 話した] から嫉妬している、メアリーと_i。(Fukutomi 2006:315)

(8a, b)では、理由節である「ジョンが e_i 食べたので」と「ビルが e_i 話したから」から、「ケーキを」と「メアリーと」が右方転移されて、非文法的である。これは、右方転移が付加詞条件に従うことを示している。

また、等位構造制約 (coordinate structure constraint: CSC) や前置詞を残留させることを禁じる条件にも従う。

(9) a. *ジョンは[みかんと e_i]を食べたよ、りんご $_i$ 。

b. *今年は[みかんと e_i]が豊作だ、りんご $_i$ 。

(10) *太郎がこの問題で e_i と議論したよ、花子 $_i$ 。

(9)では、等位接続されている「みかんとりんご」から、一方の被接続要素「りんご」が右方転移されている。(9)が非文法的であることから、右方転移がCSCに従うとすることができる。また、(10)では、後置詞「と」をもとの位置に残して、「花子」のみ右方転移されているが、非文法的である。これは、前置詞を残留させることを禁じる条件に、右方転移が従うということを示している。

日本語の右方転移と島の条件の関係をまとめると、次のようになる。右方転移は、複合名詞句制約・関係詞節の島の条件、付加詞条件、等位構造制約、前置詞を残留させることを禁じる条件に従う。これらの現象は、右方転移が移動現象であると仮定するならば、容易に説明することのできる現象である。⁵

2.2. 上方制限 (upward boundedness)⁶

久野(1978:74)は、日本語の右方転移文において、右方転移された要素が「省略文」の中の従属節内の構成要素として解釈されることが許されることを指摘している。すなわち、右方転移には、上方制限が課されないということである。この点を、(11)を例に取り、考えてみることにする。

(11) a. [この間、あのレストランで何を食べたか] 覚えているかい。

b. [何食べたか] 覚えているかい、この間、あのレストランで。

(11b)の「この間、あのレストランで」は、(11a)の従属節内「この間、あのレストランで何を食べたか」の構成要素である。また、従属節全体や従属節内の要素に右方転移が適用され、主節の述語動

⁵ 右方転移を移動現象であると分析すると、属格名詞句が右方転移されることが問題となる。第2.5節を参照のこと。

⁶ 上方制限は、節の有界性 (clause-boundedness) と呼ばれることもある。

詞に後続する位置にあるのであれば、何ら問題がない。⁷ この点を、次の (12) を例に取り、考えてみることにする。

- (12) a. ジョンは[彼の妹がその本を読んだと]言ったよ。
 b. ジョンは言ったよ、[彼の妹がその本を読んだと]。
 c. ジョンは[その本を読んだと]言ったよ、彼の妹が。
 d. ジョンは[彼の妹が読んだと]言ったよ、その本を。
 e. ジョンは[妹がその本を読んだと]言ったよ、彼の。

(12b) では従属節「彼の妹がその本を読んだと」全体、(12c) では従属節内の主語「彼の妹が」、(12d) では従属節内の目的語「その本を」、(12e) では従属節の主語名詞句を修飾する属格表現「彼の」が主節の動詞に後続する位置に生じている。このように、右方転移された本来従属節内にあった要素が主節の動詞に後続する位置に生じることができる。これは、日本語の右方転移には上方制限が課されないことを示唆しているように思われる。ただし、(11, 12) からわかることは、日本語では目的語節からの右方転移がなされている場合に、上方制限が課されないということである。ここで、日本語の主語節からの右方転移が許容されるのかどうかを、考えてみることにする。

- (13) a. [駒沢大学が箱根駅伝で復路優勝したことが] 聴衆を感動させたね。
 b. [箱根駅伝で復路優勝したことが] 聴衆を感動させたね、駒沢大学が。
 c. [駒沢大学が復路優勝したことが] 聴衆を感動させたね、箱根駅伝で。

(13a) から「駒沢大学が」を右方転移すると (13b) が、「箱根駅伝で」を右方転移すると (13c) が導かれる。(13b, c) が文法的であることは、日本語の主語節及び目的語節からの右方転移には、上方制限が課されていないと結論づけることができる。⁸

⁷ Fukutomi (2006) や綿貫 (2006) 等でも、日本語の右方転移は上方制限、すなわち、右屋根制約 (right roof constraint: RRC) に従わないとの判断が示されている。

(i) a. メアリーがジョンが食べたと思っている、りんごを。(Fukutomi 2006:314)

b. 太郎が花子を買ったと言ってたよ、パソコンを。(綿貫 2006:265)

しかしながら、Tsumimura (1996:209) は、右方転移は主節内に限られた現象で、節境界を越えることはできないと主張する。

(ii) *太郎が [_s花子が _t作った] って言った、寿司を。

⁸ この特性は、Saito (1985) が指摘する、かき混ぜの長距離移動を思い起こさせる。

(i) a. その本を _i ジョンが [_sメアリーが _t買ったと] 思っている (こと)

b. その村に _i ジョンが [_sビルが _t住んでいると] 思っている (こと) (Saito 1985:156-157)

(i) では、従属節内の「その本を」と「その村に」が長距離移動により、従属節内の要素が主節の文頭に生じている。

本節では、日本語の右方転移には上方制限、すなわち、右屋根制約 (RRC) が課されていないことを見た。久野 (1978:74) は、従属節の構成要素を右方向に移動する規則は、その従属節の境界線を越えて適用してはならないとする RRC の観点から、日本語の右方転移文の派生に、右方向への移動、右方移動は関与していないと主張する。日本語の右方転移の派生方法として、右方移動に基づく分析には問題があることがわかる。⁹

2.3. 主節現象 (main clause phenomena)

日本語の右方転移が移動現象ではないことを示す第2番目の証拠として、右方転移が主節現象であることを指摘することができる。日本語の右方転移が主節現象であることは、Haraguchi (1973), Saito (1985), Endo (1996), Fukutomi (2006) 等で指摘されている。¹⁰

- (14) a. ジョンがメアリーにその本を渡したこと
 b. *ジョンがメアリーに渡した、その本をこと
 c. *来たよ、バスがという事実 (cf. Endo 1996: 6)
 d. *メアリーが[ジョンが食べたリンゴをと]思っている (Fukutomi 2006:313)

(14b, c, d) が非文法的であることは、従属節内において右方転移が許容されないということを示している。このように、右方転移は、左方への移動現象であるかき混ぜとは異なる特性を示すことがわかる。すなわち、右方転移は主節現象であるが、かき混ぜは主節にのみ限られた現象ではなく、従属節内でのかき混ぜも存在するのである。

- (15) a. ビルは[その本を メアリーが 太郎に 渡したと] 言った。
 b. ビルは[彼女を 太郎が 批判したと] 言った。

(15a, b) では、目的語の「その本を」と「彼女を」に従属節内にかき混ぜ規則が適用され、文法的である。右方転移は主節現象であり、左方移動規則のかき混ぜとは異なる特性を示す。

2.4. 主語名詞句の右方転移

日本語の右方転移において、様々な表現が、右方転移された要素として述語に後続する位置に生じる。この点を、(16) を例に取り、考えてみることにする。

⁹ Kayne (1994) の反対称性統語論に基づく句構造が正しいとするならば、右方向への移動は存在しない。

¹⁰ Emonds (1976:34) は、右方転移は根変形 (root transformation) であり、文法性は右方転移された要素が主節の節点 S に直接支配されているかどうかによるとしている。一方、Ross (1986/1967), Rodman (1997/1974), Gundel (1977/1974) は、右方転移が従属節内であっても適用されることを指摘している。

- (16) a. ジョンがメアリーにその本を渡したんだ。
 b. メアリーにその本を渡したんだ, ジョンが。
 c. ジョンがメアリーに渡したんだ, その本を。
 d. ジョンがその本を渡したんだ, メアリーに。

(16b, c, d) から明らかなように、目的語名詞句「その本を」や「メアリーに」が右方転移されるように、主語名詞句「ジョンが」も右方転移される。このように、右方転移では主語名詞句が右方転移される。これは、左方移動であるかき混ぜと大きく異なる特性である。すなわち、Saito (1985) が指摘するように、主語名詞句がかき混ぜの適用を受けることはないからである。

- (17) a. * そのお菓子が_i ジョンが [s' t_i おいしいと] 思っている (こと)
 b. * その本が_i ジョンが [s' t_i よく売れていると] 思っている (こと) (Saito 1985:185)

一般に、主語名詞句がかき混ぜの規則の適用は受けることはないが、主語名詞句の右方転移は可能である。右方転移を左方移動規則として特徴づけることはできないように思われる。

2.5. 属格名詞句の右方転移

久野 (1978:75) が指摘しているように、名詞句の修飾語も右方転移される。この点を、(18, 19) を例にとり、考えてみることにする。

- (18) a. 何か外国にないような大研究をなさったのですか。
 b. 何か大研究をなさったのですか, 外国にないような。
 (19) a. 君、僕の妹と結婚してくれないか。
 b. 君、妹を結婚してくれないか, 僕の。¹¹

(18-19) から明らかなように、前位修飾語としての節や限定詞としての属格表現も右方転移されることが可能である。しかしながら、右方転移とは異なり、(20) で示されているように、かき混ぜの規則の適用を属格名詞句が受けることは許されない。

¹¹ 右方移動と上方制限の関連を議論する際に、名詞句の属格表現が右方転移されることが指摘されている。第2.2節を参照のこと。英語においても、属格名詞句が右方転移されることが Ross (1986/1967:260) や Huddleston and Pullum (2002:1411) で指摘されている。なお、右方転移された名詞句の属格表現と対応する代名詞に下線を引くことにする。

- (i) a. I noticed his car in the driveway last night, your friend from Keokuk. (Ross 1986/1967)
 b. What's his name, your son? (Huddleston and Pullum 2002)

(20) a. *アメリカの_i [テレビ番組では _{t_i} 大統領選挙の話題で持ちきりだ]。

b. *富士山の_i [今年は例年になく _{t_i} 雪景色が美しい]。

この属格名詞句が右方転移されるという特性は、左方移動規則であるかき混ぜとは大きく異なる特性である。

2.6. 残余代名詞 (resumptive pronouns)

Haraguchi (1973) や綿貫 (2006) 等で指摘されているように、日本語の右方転移において、残余代名詞の出現が許されることがある。¹²

(21) a. ジョンは彼女が好きです、メアリーが。

b. 太郎が彼女を殴ったんだ、花子を。(綿貫 2006:253)

(21a) では「彼女が」と「メアリーが」、(21b) では「彼女を」と「花子を」が同一指示の名詞句である。

Tsujimura (1996) は、Shibamoto (1985) の研究、すなわち、日本語の右方転移は男性よりもむしろ女性が使う傾向にあり、男性が使う場合には、右方転移された要素に対応する代名詞、あるいはそれを指示する要素が少なくとも、前半部の元々の位置にあることを報告している。

(22) a. それは古いかもしれませんよ、我々の感覚は。

b. 私つついっつゆっちゃうんですね、私の場合は。

c. 子供と遊んだりするのは楽しいね、あれ。

(22) の「それは」、「私」、「子供と遊んだりするのは」は、右方転移された要素と同じことを指示する要素である。Shibamoto (1985) によれば、男性は右方転移を強調や述べ直しの手段として使っていると説明している。¹³

右方転移では顕在的な残余代名詞が生じるが、かき混ぜでは生じることはない。¹⁴

¹² 残余代名詞と右方転移された要素、あるいは右方転移された要素に対応する代名詞、あるいはそれを指示する要素と右方転移された要素に、下線を引くことにする。

¹³ 綿貫 (2006) は、残余代名詞に関して、右方転移文の前半部と右方転移された要素を含む文との構造的・意味的な平行性に基づく削除分析を提案している。

¹⁴ ただし、文頭にあるガ格名詞句が大主語 (major subject) である時、残余名詞句が生じることが marginally に許される。

(i) ??この議論_iが [_s ジョンが [_s それ_iが 一番説得的だ] と思っている。(Saito 1985:222)

(23) a. *その本_iを[_s ジョンが [_s メアリーが それ_iを買ったと] 思っている (こと)

b. *その村_iに[_s ジョンが [_s ビルが そこ_iに住んでいると] 思っている (こと)

(Saito 1985:221)

上方制限が右方転移に課されていないことから、右方転移は右方移動に基づく現象ではない。また、右方転移が主節現象であること、主語や属格名詞句が転移されること、残余代名詞が生じる場合があることから、右方転移は左方移動に基づく現象ではないように思われる。¹⁵

3. まとめ

本稿では、日本語の右方転移の諸特性に基づき、日本語の右方転移文に対する移動分析 (Haraguchi (1973) の右方移動分析, 黒木 (2006) や Fukutomi (2006) の左方移動分析) と久野 (1978) や Abe (2004) が提案する「省略文 + 繰り返し文」に基づく削除分析を概観し、右方転移に対する分析の可能性を探った。

日本語の右方転移は、複合名詞句制約・関係詞節の島の条件、付加詞条件、等位構造制約、前置詞を残留させることを禁じる条件に従うことが示された。この現象は、右方転移が移動現象であると仮定するならば、容易に説明することのできる現象である。日本語の右方転移には上方制限、すなわち、右屋根制約 (RRC) が課されていないことを見た。この点から、日本語の右方転移文の派生に、右方向への移動、すなわち、右方移動は関与していないことになる。また、右方転移が主節現象であること、主語や属格名詞句が転移されること、残余代名詞が生じる場合があることから、右方転移はかき混ぜのような左方移動に基づく現象ではないように思われる。日本語の右方転移には、左方移動分析を支持する特性と削除分析を支持する特性とが混在しているように思われる。今後は、左方移動分析と削除分析のいずれかの分析で統一的に扱うことができるのか、それとも、左方移動分析と削除分析の双方の分析を必要とする現象であるのか、詳細な吟味が必要であるように思われる。

参考文献

- Abe, Jun. 2004. "On Directionality of Movement: A Case of Japanese Right Dislocation," *Proceedings of the 58th Conference*, 54-61, The Tohoku English Literary Society.
- Emonds, Joseph. E. 1976. *A Transformational Approach to English Syntax: Root, Structure-Preserving, and Local Transformations*, New York: Academic Press.

¹⁵ 久野 (1978:77) は、右方転移文のあとに、確認のため、省略されていた要素を繰り返したり、補足的インフォメーションを付け足すというプロセスは、右方転移文とは独立して仮定しなければならないと主張し、前半部で何の省略が行われていないにも拘わらず、述語動詞の後に繰り返しが行われている (i) を提示している。詳細な分析は、久野 (1978:77-80) を参照のこと。

(i) 山田は馬鹿だよ、あいつは本当に。

- Endo, Yoshio. 1996. "Right Dislocation," *Formal Approaches to Japanese Linguistics 2* (MIT Working Papers in Linguistics 29), 1 -20.
- Fukutomi, Yasuyuki. 2006. "An Antisymmetric Analysis of Japanese Right Dislocation," 『言葉の絆 (藤原保明博士還暦記念論文集)』, 312-325, 開拓社.
- 久野 暲 1978.『談話の文法』大修館書店.
- 黒木暁人 2006.「日本語右方転移文の構造について：左方移動分析の観点から」*Scientific Approaches to Language 5*, 213-231, Center for Language Sciences, Kanda University of International Studies.
- Gundel, Jeanette K. 1974. *Role of Topic and Comment in Linguistic Theory*, Doctoral Dissertation, Ohio State University (Reproduced by the Indiana University Linguistics Club, 1977).
- Haraguchi, Shosuke. 1973. "Remarks on Dislocation in Japanese," ms., MIT.
- Huddleston, Rodney, and Pullum, Geoffrey K. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Kayne, Richard. 1994. *The Antisymmetry of Syntax*, Cambridge, MA: MIT Press.
- Rodman, Robert. 1997 "On Left Dislocation," *Materials on Left Dislocation*, 31-54, edited by Elena Anagnostopoulou, Henk van Riemsdijk, and Frans Zwarts, Amsterdam: John Benjamins. (*Papers in Linguistics 7*, 437-466, 1974)
- Ross, John R. 1986. *Infinite Syntax!* New Jersey: Ablex Publishing Corporation. (*Constraints on Variables in Syntax*, Doctoral Dissertation, MIT, 1967)
- Saito, Mamoru. 1985. *Some Asymmetries in Japanese and their Theoretical Implications*, Doctoral Dissertation, MIT.
- Shibamoto, Janet S. 1985. *Japanese Women's Language*. New York: Academic Press.
- Simon, M. Endo. 1989. *An Analysis of the Postposing Construction in Japanese*. Doctoral Dissertation, University of Michigan.
- 高見健一 1995.『機能的構文論による日英語比較 - 受身文, 後置文の分析 - 』くろしお出版.
- Tsujimura, Natsuko. 1996. *An Introduction to Japanese Linguistics*, Cambridge, MA.: Blackwell Publishers.
- 綿貫啓子 2006.「日本語の後置文：左方移動文との相違」*Scientific Approaches to Language 5*, 251-268, Center for Language Sciences, Kanda University of International Studies.
- 綿貫啓子 2012.「後置文の意味機能から探る話し言葉の生成のしくみ」*Scientific Approaches to Language 11*, 137-158, Center for Language Sciences, Kanda University of International Studies.